

N ews

医学部ニュース

No. 327 / 2025, March

● Nihon University School of Medicine



日本大学医学部附属 看護専門学校卒業式



日本大学医学部附属 看護専門学校卒業式



医学部ニュース News & Topics

Contents

● 卒業を祝して	2
● 学生生活	5
● 卒業を祝して	12
● ニュース	15



photo by M.Matsubara



卒業を祝して

～夢に向かって～

医学部長 木下 浩作

ご卒業、誠にありがとうございます。本日、卒業という大きな節目を迎えた皆さん、そしてこれまで支えてこられたご家族の皆さまに、心よりお祝い申し上げます。医学の道を志し、幾多の試練を乗り越え、今日という日を迎えられた皆さんの努力と情熱に、深い敬意を表します。

学生生活を振り返ると、挑戦と成長の連続だったことでしょう。特に、近年は新型コロナウイルスのパンデミックにより、世界中がかつて経験したことのない困難に直面しました。医学部での学びも例外ではなく、授業や実習の形態が大きく変わる中で、多くの制約を受けながらも、皆さんは学ぶ姿勢を貫き、知識と技術を磨いてきました。時には、不安や戸惑いを感じることもあったかもしれません。しかし、その中で仲間と励まし合い、共に乗り越えてきた日々は、何ものにも代えがたい財産です。その経験が、今後の医師としての道を歩む上で、確かな自信と支えとなることでしょう。

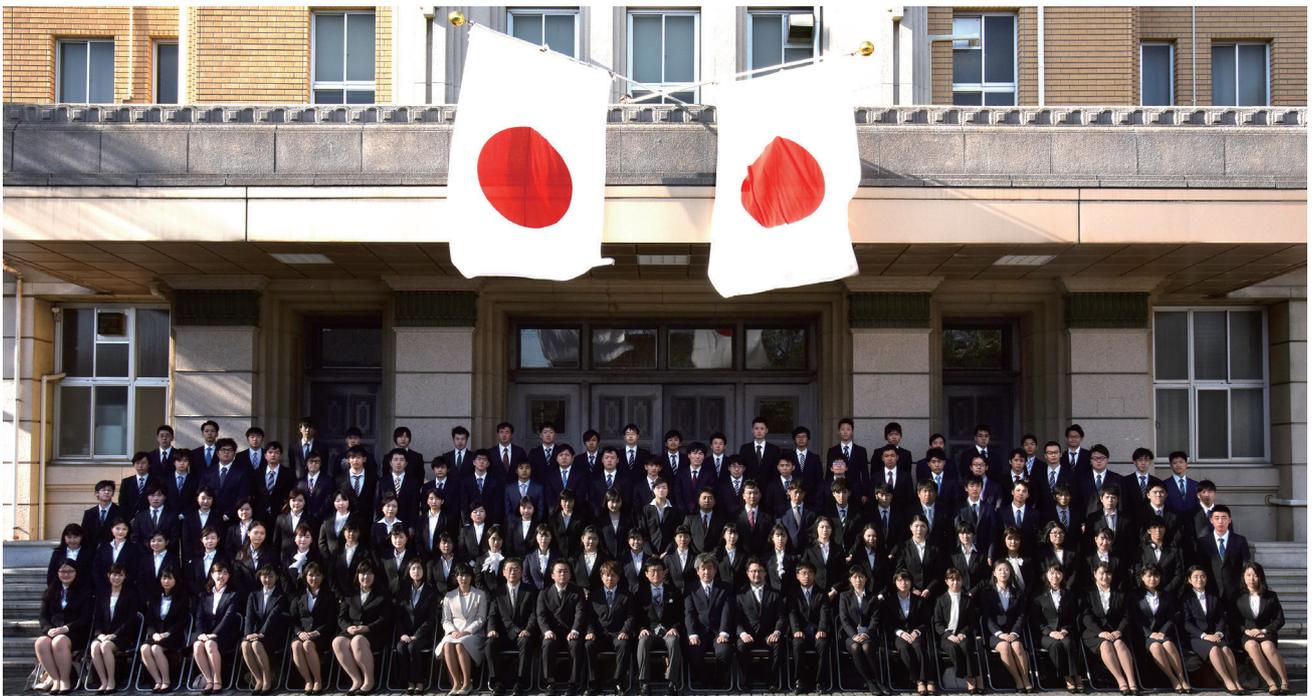
日本大学医学部は、まさに今、新たな未来へ向けて大きく歩みを進めています。医学部創立100周年を迎え、板橋キャンパスでは新学部棟・新病院の建設が本格的に始まっています。新しい学び舎は、最新の教育・研究設備を備え、未来の医療を支える場として発展していきます。この改革が完了する頃、皆さんはそれぞれの専門分野で活躍し、医療の最前線で力を発揮していることでしょう。本学の発展とともに、皆さん自身もまた、医療人としての成長を遂げ

ることを心より願っています。

卒業後、皆さんはそれぞれの道を歩み始めます。臨床医として患者と向き合う人もいれば、研究の道を進み、新たな医療の可能性を切り拓く人もいるでしょう。どの道を選んだとしても、医師としての責任と誇りを胸に、誠実に職務を果たしていくことが求められます。これからの道のりでは、さまざまな困難や迷いに直面することもあるでしょう。時には、理想と現実のギャップに悩むこともあるかもしれません。しかし、どんな時も「どのような医師になりたいのか」を自らに問い続けてください。そして、その夢や理想に向かって、一步ずつ確実に前進してください。

皆さんに改めて贈る言葉があります。それは、「夢を持ち続けること」です。夢は、簡単には実現しないかもしれませんが、それを追い求めることで、皆さんはより良い医師へと成長していきます。医療の世界は日進月歩で進化し続けています。その変化に対応し、新たな技術や知識を学び続ける姿勢が求められます。同時に、患者一人ひとりに寄り添い、人間味あふれる医療を提供することも、医師としての重要な役割です。どうか、これからも誇りを持って、自らの道を切り拓いていってください。皆さんの未来が、希望に満ちたものであることを、心からお祈り申し上げます。改めまして、ご卒業、おめでとうございます。

(60回 救急集中治療医学分野)



令和6年度卒業生の入学時の集合写真



卒業を祝して

同窓会長 吉澤 明孝

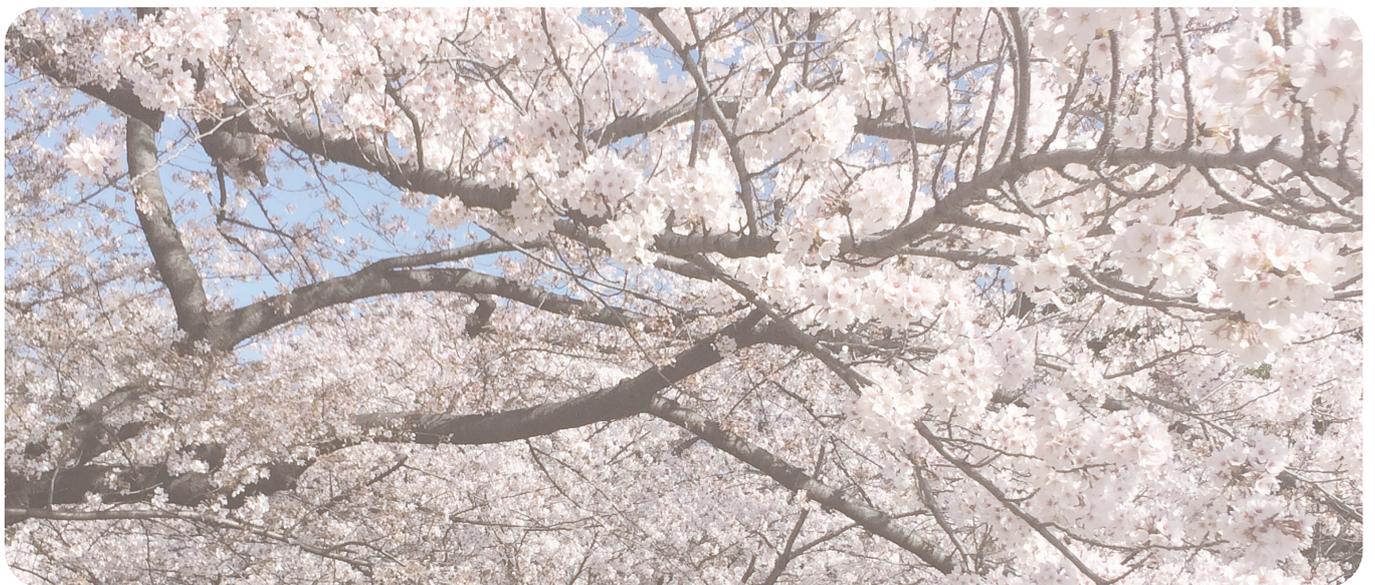
令和7年3月にご卒業の98回生の皆さん、誠におめでとうございます。同窓生を代表して心よりお喜び申し上げます。ご父兄の皆様、長くにわたりご苦労様でした。卒業生の皆さん、産声を上げてからここまで育ててくださったご両親、また本学で医学を教えてくださいました先生方、医療を指導してくれた医療スタッフ、臨床経験をさせてくださった患者さん、そのご家族に感謝の気持ちを忘れずにそのご恩に報いるようにこれからの医師としての人生を歩んでください。これからがスタートです。

皆さんは、学生の間は同窓会の準会員として同窓会の一員でした。卒業と同時に正会員として同窓会の一員となりました。同窓会の先生方は全国各地で地域医療、学会、医師会など幅広く貢献されております。また日大は総合大学であり、日大校友会（各学部同窓会の総称）の特色は「絆」の強さが誇りです。全国で他学部校友（日大卒）との輪が自然と地域で広がっています。アスリート、関取、芸術関係、企業など多職種の校友がおり、日大校友会は日本最大の輪であることは間違いありません。皆さんも今日からその輪

の一員であることを誇りに医療に邁進してください。

また皆さんは学生生活で一番華やかで絆造りに大切な5年間をコロナ禍によりオンライン授業、授業以上に人間形成に重要な同級生の友人関係、先輩後輩の縦関係、クラブ活動などに厳しい規制が入ってしまいました。しかしそうした苦境を経験したことは、皆さんの長い人生の中で必ず肥しとなると思います。またコロナは医療界に感染症の恐ろしさを振り返り、感染予防の基本から立ち返れと言う啓示であったような気がします。またコロナは医療界だけでなく働き方改革としてオンライン、ITの時代を進ませたことも間違いありません。この試練を共に過ごした98回生の同窓の絆はこれからより強いものとなり、よき思い出になることでしょう。また、この試練をこれからの診療、研究、人生の大きな原動力になることを信じています。

患者ファーストの精神を忘れずにこれから始まる医師としての道を同窓会は応援しています。本当におめでとうございます。





卒業を祝して

翠心会後援会長 北野 滋久

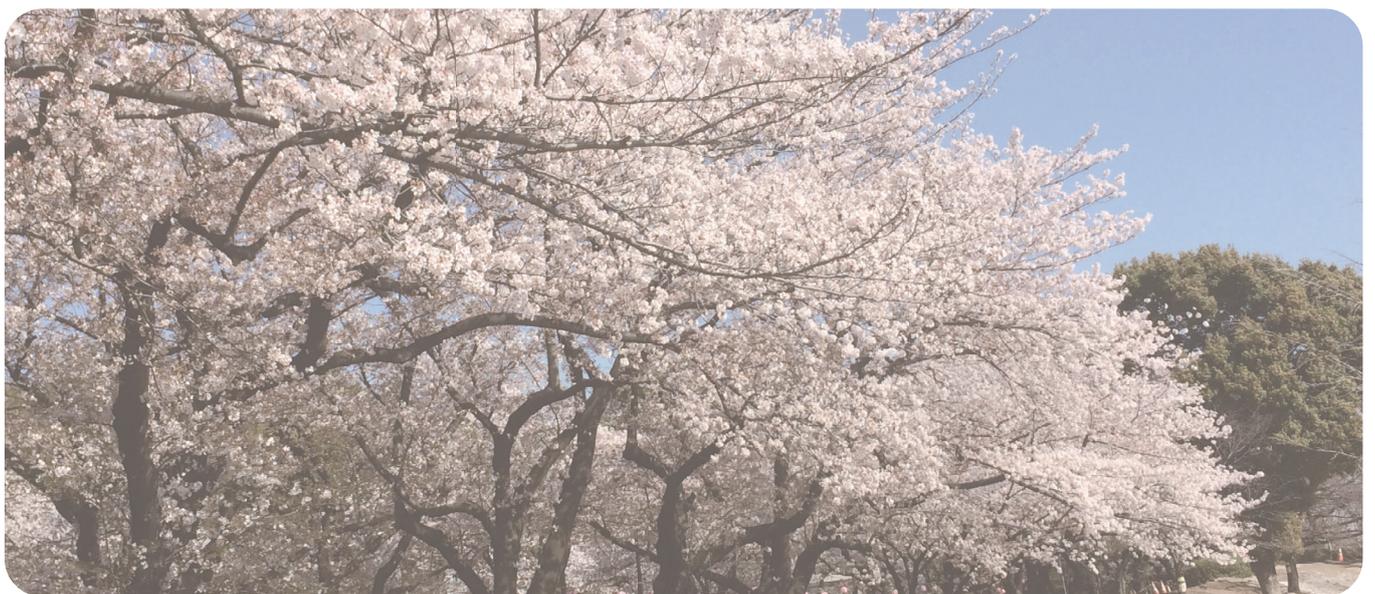
卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

皆さんは本学入学後6年間にわたって勉学に励まれ、無事、卒業の日を迎えることができました。現代の医学部のカリキュラムは膨大な量の医学的知識の習得が求められるため、心身ともに相当な負担があったかと思います。乗り越えられた皆さんはご自身に大いに自信を持ってください。そして、皆さんが恵まれた環境で学生生活を全うできたのは、ご両親、ご家族、友人、サポートいただいた本学の職員の方々をはじめ皆様のご支援があったことです。これからの人生においても皆様への感謝の気持ちを決して忘れないようにしてください。

皆さんは医学生時代に新型コロナウイルス (COVID-19) のパンデミックという歴史的出来事を経験され、講義、医学実習、病院見学、クラブ活動などの多くの活動が制限されてしまいました。2023年5月から5類感染症の移行し、ようやく日常生活が徐々に取り戻されつつあり、通常の日常生活が送れることの有り難さを実感されているのではないのでしょうか。医学を本格的に学び始めた時期に、病の恐ろしさ、理不尽さについて身をもって実感・経験されたこ

とは、医学を生業とする皆様にとって大いに考えさせられる時間であったことでしょう。あらゆる経験、その時に湧き起こった様々な感情（楽しさ、喜び、悲しみ、辛さ、悔しさ、達成感、挫折感など）、それらの全てが皆様のこれからの生き様次第で人生の糧になり得ます。もし、学生時代にやり残したことがあったとしても、これからの長い人生の中でいくらかでも取り戻せます。本学を卒業された皆さんであれば、自己実現を達成できる潜在能力は間違いなくあるはずです。置かれた環境で人々とのご縁を大切にして謙虚で素直に生きていけば、自らが望む生き方に近づいていくのではないかと思います。よく学ぶとともに、自分自身が人生を楽しむ心の余裕だけは失わないようにしてください。

いざという時に母校はとても温かく有難い存在です。どこにしようとも日本大学医学部卒であることに誇りを持って歩いてください。卒業生の皆さんが、それぞれの道において「醫明博愛」を実践し、良き医療人に成長されること、健康で幸福な人生を歩まれることを祈念いたします。



令和6年度 各賞受賞者



学長賞受賞



児玉 侑子



優等賞受賞



中静 れみ



矢口 暁理



新井 里佳子



根間 優香



学部長賞
受賞



児玉 侑子



中静 れみ



矢口 暁理



根間 優香



大久保 琢人

学部長賞スポーツ部門

柔道部



川村 真由

令和元年度第62回
東日本医科学生総合体育大会柔道競技
女子個人戦 優勝
令和元年度第63回
関東医科大学柔道大会
女子個人戦 優勝
令和4年度第64回
関東医科大学柔道大会
女子の部 優勝
令和5年度第66回
東日本医科学生総合体育大会柔道競技
女子個人戦無差別級 優勝
令和6年度第67回
東日本医科学生総合体育大会柔道競技
女子個人戦無差別級 優勝

陸上競技部



北尾 嘉章

令和5年度第66回
東日本医科学生総合体育大会陸上競技
男子1,500m 第3位
令和5年度第40回
関東医科大学対抗陸上競技大会
男子1,500m 優勝
令和6年度第67回
東日本医科学生総合体育大会陸上競技
男子1,500m 優勝
令和6年度第67回
東日本医科学生総合体育大会陸上競技
男子5,000m 準優勝
令和6年度第41回
関東医科大学対抗陸上競技大会
男子1,500m 優勝
令和6年度第44回
霜月戦 男子1,500m 優勝
令和6年度第44回
霜月戦 男子800m 優勝

水泳部



田辺 凌

令和4年度第65回
東日本医科学生総合体育大会水泳競技
男子100mバタフライ 優勝
令和4年度第65回
東日本医科学生総合体育大会水泳競技
男子200mバタフライ 優勝

水泳部



原 拓也

令和5年度第66回
東日本医科学生総合体育大会水泳競技
男子 50m平泳ぎ 優勝

令和6年度 各賞受賞者

学部長賞功労部門

クラス委員（2年以上経験者）



川村 真由



木内 琳央



堀 裕輝



木下 雄太郎



原 拓也

翠心会長

翠心祭実行委員長

医学部団体賞スポーツ部門

バドミントン部（男子） 令和6年度第58回
全日本医科学生体育大会王座決定戦
バドミントン部門男子 準優勝

硬式テニス部（女子） 令和6年度第67回
東日本医科学生総合体育大会
テニス競技 優勝

医学部同窓会長賞文化部門



友田 英里

第120回
日本精神神経学会学術総会
優秀演題賞
「大学病院精神科初診患者に
おける不眠と便秘の関連：連続
症例を対象とした検討」

医学部同窓会長賞スポーツ部門



竹内 千恵

硬式テニス部
令和5年度
関東医科歯科リーグ秋季個人戦
女子ダブルス 優勝

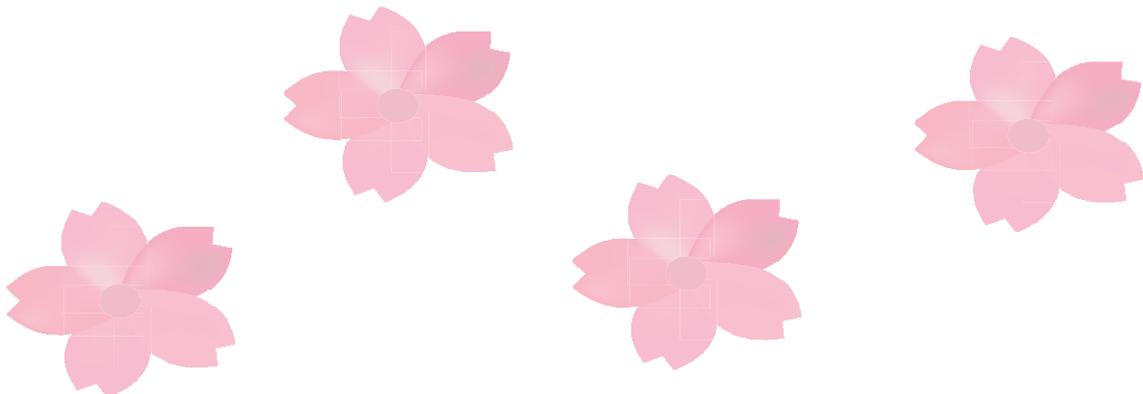


堀 裕輝

剣道部
令和6年度第67回
東日本医科学生総合体育大会
剣道競技 男子個人 敢闘賞

翠心後援会長賞スポーツ部門

バレーボール部（女子） 令和6年度第102回春季関東医歯薬バレーボール大会 準優勝
令和6年度春季関東医科リーグ 優勝



大学院4年間を振り返って

大学院4年生 清水 なつき

4年前の秋頃に大学院に入学しようか迷っていた際、小児科で新たな研究が始まるので、それを一緒にやってみないかと声をかけていただいたことが入学のきっかけでした。マウスに触れるかの不安はありましたが、自分で実験し解析することに興味があったため、自分の知識や技術を少しでも増やせたらと思い、入学を決意しました。

大学院の研究を通して、実際に自分で手を動かして実験をしたり、様々な学会で発表させていただいたり、英語論文の作成にあたり数多くの論文を読んだり、色々勉強になることばかりでした。臨床を行いながら、さらに、大学院4年目は産休・育休を取得しながらの大学院生活で大変なことも多々ありましたが、多くの先生方にご指導、サポートいただき、無事研究を進めることができました。

今回の大学院生活を通して臨床に繋がる内容で研究することの面白さを体感することができました。この経験を今後に生かし、引き続き臨床研究を行いながら、日々の診療を続けていきたいと思っています。

最後になりますが、今回の研究でご指導いただきました内科系小児科学 森岡一朗教授、石毛美夏先生、小川えりか先生、岩間元子先生、病態病理学系微生物学分野 相澤志保子教授、高野智圭先生、十文字学園女子大学食品開発学科 辻典子先生、日本大学総合科学研究所 早川智先生に深く感謝いたします。また、研究に関わりご協力いただいた先生方に厚く御礼申し上げます。

大学院4年間を振り返って

大学院4年生 中村 隼斗

私は初期研修修了後、救命救急センターに入局しました。研修医の頃は大学院進学を積極的に考えていたわけではありません。しかし入局後、先輩医師が大学院で得た学びを臨床現場でも活かしている場面に多く立ち合い、私自身も進学を決意し、外科系救急医学を専攻しました。卒業を間近に控えこの4年間を振り返ってみますと、大学院で得た一番の学びは、医学研究を通じて得た科学的な思考プロセスであると感じます。これは単に今後の研究のためだけではありません。日々の診療の中で病態不明な患者が目の前に現れた時、勿論それまでの経験が役立つことも多くある一方で、経験が先入観に繋がり誤った推察をしてしまう事態も十分に起こり得ます。しかしこのような場面こそ、目の前の事象を謙虚にとらえ、何が真実かを見極めて誠実に対応する力が必要とされるのだと思います。この物事の捉え方とそこから真実を導き出すための科学的な思考プロセスこそ、大学院で行った研究を通じて得た大きな価値のある学びです。大学院進学は有意義な選択であったと確信しております。この場をお借りして、ご指導いただいた木下先生、山口先生に深く感謝申し上げます。研究者としてはようやくスタートラインに立ったところであり、まだまだ未熟ですが、謙虚な姿勢を忘れず今後ともより一層の努力を重ねていく所存です。

1年生を振り返って

医学部1年 村山 汀

日本大学医学部に入学してから、気づけばもう一年。慌ただしくも鮮やかに過ぎた日々がまるで昨日のように思えます。開講式で初めて同級生と顔を合わせた瞬間は、少しの緊張と同時にこれから6年間互いに切磋琢磨しながら絆を深めていく仲間であるという実感が重なり、大きな喜びに包まれたことをよく覚えています。

いよいよ授業が始まるとすぐに「自然科学実習(生物)」の講義でラットの解剖に臨むことになり、強い驚きを覚えました。初めて手にしたラットやメスの重みは想像をはるかに超えていました。その確かな重みは、これから私たちが進む道の責任の深さを改めて認識させてくれるものでありました。何もかもが手探り状態だった私たちに先生方は親身に寄り添い支えてくださり、臓器や血管の位置、走行を学ぶことができました。

後期になると基礎医学である解剖学の授業が始まり、前期の授業とは一変しました。私の中で解剖学の印象は、前期で行ったラットの解剖のようなものでした。ところが、私の予想とは反して組織学の授業が最初に始まりました。当初重要なのはマクロな視点であり、ミクロな細部にはそれほど重きを置かなくてもよいと恥ずかしながら私は考えていました。しかし、授業が進んでいくにつれて自分の中で、今まで点でしかなかった知識がつながり線となり、その重要性和面白さに気づかされました。特に組織学を学んだことで疾患がどうして起こるのか、その疾患に対する薬がどうして効くのかという疑問が解け、ミクロな視点の学問に魅力を感じました。

また、部活動においても今年から再開された新入生歓迎会で先輩方とたくさん交流する機会がありました。そこでは学校生活や勉強についての様々なアドバイスを先輩方から頂き、貴重な機会になったと強く思いました。この新入生歓迎会のおかげで、多くの1年生が部活に入部し様々な大会や演奏会などに挑んでいたと感じました。

最後に当たり前な日常が戻ってきたことに感謝しながら、2年生から始まる人体解剖実習や基礎医学統合試験などに向けて今ある知識を磨き、さらに邁進していきたいと思えます。

2年生を振り返って

医学部2年 鹿島 千楓

新しい大学生活の幕開けに目を輝かせ入学した春から2年が経過した。この2年間を振り返ると、あっという間に感じる一方で、その間に経験した多くのことが深く心に刻まれていることに気づく。

この1年を通じて最も意義深かった経験は、何と言っても解剖実習である。脳実習、そして人体解剖実習では、ご献体いただいた実際のお体に触れ、座学だけでは得られない人体の構造への理解を一層深めることができた。解剖実習は、知識を実際の体験に結びつける貴重な機会であり、その中で生まれた数多くの疑問が学びをより深めるきっかけとなった。実習の中では、班員や先生方とのコミュニケーションを通じて多くの気づきと学びを得ることができたが、同時に自分の理解の浅さや知識の未熟さに直面することも多く、向上心が一層強くなった。長時間の実習は体力的にも厳しく、集中力が途切れそうになることもあったが、班員とお互いに励まし合い、助け合うことで、厳しい状況でも前進できたことは大きな学びとなった。また、実習を進める中で私たちが医学を学べる環境について深く考えさせられ、常に感謝の気持ちを持ち学び続けることの重要性を実感した。改めて、白菊会の方々には深い感謝の気持ちを抱き、その思いを今後の学びに活かしていきたいと強く感じている。

年度末には、今年度から導入されたパソコンやiPadを用いたオンライン形式での基礎医学統合試験を受験した。この試験では、過去2年間に学んだ基礎医学全範囲が問われ、試験当日は学年全体に緊張感が漂っていた。授業がない日でも学校に足を運び、友人とともに知識の復習に励み、教え合いながら理解を深めた。不安な時には励まし合い、互いに切磋琢磨する中で、学問だけでなく絆もより一層強固になったと感じる。また、試験前には部活動の先輩や後輩から多くの激励の言葉をいただき、大きな励みとなった。基礎医学統合試験の勉強を通じて、医学の知識が着実に身につについていく実感を得ることができた。

2年生では、体力的、精神的に壁に直面することも多かったが、それ以上に充実した日々であったと感じている。多忙な日々を乗り越えた学年の仲間たちと、この先の学生生活も互いに刺激し合いながら共に成長していきたい。

3年生を振り返って

医学部3年 高橋 千夏

この1年間、非常に有意義だったと思える出来事が多数ありました。その中でも、特に有意義だった出来事について書きたいと思います。

一つ目は翠心祭の「カラー写真で見る日本大学医学部の100年」という企画にサポートとして携わった事です。この企画は2025年に迎える日本大学医学部100周年に先駆けたもので、医学部の昔の白黒写真をカラー化して展示し、観客の方々に医学部の歴史を感じてもらおうという趣旨のもと、開催されました。当日は非常に盛況で、保護者や地域の方々など、多くの方が訪れてくださいました。そして、企画を通じて、写真を提供してくださったOBの先生、主催者の教授と交流できたことが、私にとって非常に意義深い体験となりました。お二人は、学生の私に対してもフラットに接してくださり、長時間、何気ない話から社会情勢についてまで語り合うことができ、大変印象に残っています。

二つ目はPBLです。PBLは日本語で「課題解決型学習」と訳される勉強法です。日本大学医学部では提示された症例をもとに、検査、診断、治療法などについて学生達で議論します。実際にPBLを経験してみて、非常に学習効果が高いと感じています。まず、症例について皆で調べるので、一人で調べるよりも多くの情報を短時間で得ることができる点が良いです。また、受け身の講義と異なり、学生自らが調べ、考え、発言しなければならないので、積極的に学習に参加することになります。それによって得る学びは大きいですし、記憶にもしっかりと残ります。さらに、他の学生の意見に「そんな視点があったのか」「そんな考え方があるのか」と思われる事が多く、視野を広げ、様々な価値観を知る機会になります。チューターの先生方は、学生の議論をしっかりと聞き、的確なアドバイスをくださるだけでなく、励ましの言葉もかけてくださることがあり、そのおかげで勉強へのモチベーションも高まります。もちろん、PBLには改善点もありますが、多くのメリットがあると感じており、もっと受け身の講義を減らして、PBLのようなアクティブ・ラーニングを増やしてほしいと思います。

最後になりましたが、この1年間支えてくださった方々に心から御礼申し上げます。4年生も一つ一つの事に全力で取り組み、患者さんから信頼される医師になるため努力して参ります。

4年生を振り返って

医学部4年 高畑 朱里

4年生を振り返り、今年もまた、時の流れの速さに驚かされる一年でした。6年間の学生生活において、2年生の基礎医学統合試験、4年生のCBT・OSCE、そして6年生の医師国家試験は山場であります。今年は、その中でもCBT・OSCEという大きな壁に挑まなければならないという緊張感から始まったことを覚えています。

CBTは、これまで学習してきた座学の全範囲が試験に出題されます。膨大な量の知識を整理しながら復習し、自分の中で知識を体系化しながら弱点を克服し、1問1問着実に得点できるよう心掛けました。OSCEでは、実習の授業の中で、どのような目的で、何を診るための手技かを意識しながら取り組みました。また、同期を誘い放課後に自主練をし、スムーズに手技ができるまで何度も何度も練習しました。勉強で行き詰まったときは同期と助け合うことで、皆で合格することができました。

CBT・OSCEに合格し、11月に初期BSL開始式が行われ、無事Student doctorになりました。白衣を授与された瞬間、病院に入るのに相応しい医学生でなければならないという責任と覚悟を実感しました。また、病院実習では、座学では知ることのなかった臨床手技やチーム医療について、自ら進んで学んでいくことを心掛けなければならないと決意を新たにしました。

また病院実習が始まり、様々な診療科をローテーションする中で、多くの症例を経験させていただきました。座学だけでは不安定だった知識が、実際に患者さんを通して定着することもある一方で、自分の知識が点と点だらけで結びついていないことを実感する場面もありました。これらの経験を糧に、次の学びに繋げていきたいと考えております。

4年生の病院実習では、先生方のご指導のもと、大変有意義な時間を過ごさせていただいております。お忙しい中、私たち学生に学びの場を提供してくださる先生方に、心より感謝申し上げます。

5年生の実習では、地域実習を含め、全ての診療科をローテーションします。複数の病院を訪れる機会も増え、より多くの学びが得られると伺っています。この貴重な機会を無駄にせず、さらなる成長を遂げるため、日々の努力を怠らず、精進して参ります。

5年生を振り返って

医学部5年 大下 愛美

早いもので、医師国家試験まで残り1年を切り、5年生としての学生生活も終盤を迎えました。この1年間は、4年生の頃よりも本格的な病院実習が中心となり、大きな試験が少ない分、自分の興味や将来についてじっくりと向き合うことができた貴重な時間でした。

全診療科をローテーションする実習を経て、特に強く感じたのは、自分の将来像が以前よりも明確になったことです。診療科ごとに毎週のように先生方から志望科を尋ねられる中で、自分の興味や適性について考える機会が増え、自然と志望科について説明できるようになりました。同級生たちもそれぞれ目標を明確にしていく様子が見られ、互いに刺激を受ける日々でした。

また、この1年は初めて学力統一試験（卒試）を経験した年でもありました。6年生と同じ試験内容で合格ラインを超えるには相応の努力が必要で、学年全体として徐々に国家試験を見据えた勉強を始める雰囲気が高まってきました。

学業以外の時間も病院見学や病院の説明会の参加に勤しむ多忙な日々の中で、リフレッシュする時間も忘れずに大切にするように心がけました。休日には友人とバーベキューや旅行を楽しむなど、時間の調整がきく学生の間にはか出来ないような思い出作りを通して将来働き始めてから後悔しない為に全力で課外活動にも取り組むようにしました。このような経験は、将来働き始めてからの糧になると感じています。

来年度はいよいよ6年生となり、学生生活最後の1年となります。次の卒試までの期間は各自が希望している科目での実習や研究が出来る貴重な期間となりますので、より実践的な知識や技術を身につけ、モチベーションを高めつつ、医師国家試験に向けて努力を重ねていきたいと思えます。また、同時に学生としてしか得られない経験を大切に、様々なことに積極的に取り組んでいきたいと考えています。

最後になりますが、これまで多くの先生方や患者様から貴重な経験をいただいたことに心より感謝申し上げます。また、支えてくれた家族や友人にも恩返しできるよう、これらの経験を糧に、今後も医師として、人として更に成長し続けられるよう努力して参ります。引き続きご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願ひいたします。

6年間を振り返って

医学部6年 三浦 枝里子

医師国家試験の受験を終え、学生生活も残りあとわずかとなりました。6年間という月日は、振り返ってみるとあっという間だったと感じています。来年度からは医師としての新たな生活が始まりますが、これまで学んできた知識や経験を活かせることへの楽しみがある一方で、医療現場で実際に患者さんと向き合い、責任を持って判断し、行動することへの重みも実感しています。

この6年間は、順風満帆なものではありませんでした。新型コロナウイルス感染症の流行により、講義は対面からオンラインへと変わり、戸惑うことも多くありました。思い描いていた大学生活と異なり、もどかしさもありましたが、その分、限られた環境の中で自ら考え行動する力に身についたように思います。また、試験勉強や実習ではわからないことや辛いことなどありましたが、そんなときこそ同級生と支え合うことの大切さを実感しました。互いに知識を共有し、意見を交わしながら学ぶことで、一人では得られなかった視点を持つことができたと感じています。

卒業後、私たちはそれぞれの道を歩み始めますが、医療の現場では医師一人だけで患者さんと向き合うわけではありません。多職種のスタッフと協力しながら診療を進めていくことが求められます。学生時代に同級生と切磋琢磨しながら学んできた経験は、こうしたチーム医療の場においても必ず役立つと確信しています。また、医師として求められるのは知識や技術だけではなく、患者さんやそのご家族と信頼関係を築き、寄り添う姿勢です。病気を診るだけでなく、その人の生活や思いにも目を向けられる医師になりたいと考えています。

最後に、ここまで歩んでこられたのは、ご指導くださった先生方、支えてくれた家族や友人、そして共に学び合った同級生のおかげです。心より感謝申し上げます。これからも学び続ける姿勢を忘れず、初心を大切にしながら、患者さんに寄り添える医師を目指して精進していきたいと思えます。

6年間を振り返って

医学部6年生 川村 真由

日本大学医学部での6年間の学生生活は、私にとって大変充実した毎日でした。特に最後の数か月間は、医師国家試験への準備に専念しました。時には苦しいと感じることもありましたが、友達の支えを受けながら励まし合い、お互いの理解を深めることができました。友達と共に勉強する時間は、単なる知識習得だけでなく、お互いの成長を促す貴重な時間となりました。今となっては、大変有意義な経験として心に残っています。そして、受験を終えた時の達成感は、言葉では表わせないほどのものでした。長い間の努力が実を結び、目標を達成できたことは、私にとって大きな自信となりました。

この6年間の医学部での学びと経験を通して、私は人としても成長することができたと感じています。困難に直面しても決して諦めることなく、努力を続ける姿勢を身につけることの重要性を学びました。この姿勢は、立派な医師となるための不可欠な要素であり、これからも大切にしていきたいと考えています。

また、部活動にもこの6年間全力で取り組みました。特に、東医体で優勝できたこと、東医体の主管校として大会を運営したことが記憶に残っております。主管校として後輩とともに大会を運営したことは、チームワークと連携の大切さを実感する大変有意義な機会となりました。また、私の柔道人生の集大成として、東医体を優勝することができました。

この6年間で多くの人々との出会いと繋がりを築くことができ、特にこの4人でクラス委員として仕事できたことは大変光栄に思います。これらの経験と成果を胸に、私は将来もさらなる成長を目指し、患者さんの気持ちに寄り添える医師として道を歩んでいきたいといます。日本大学医学部での6年間を重要な礎とし、これからも謙虚な心を忘れることなく精進していきます。最後にこの場をお借りして、家族や友人、そして多くの支えてくれた方々に心から感謝の意を表したいといます。6年間ありがとうございました。

6年間を振り返って

医学部6年 堀 裕輝

医師を志して15年余り——小学生の堀少年は、この日をどのように想像していただろうか。本当にこの日が来るとは半信半疑だったかもしれない。2月末にしては肌を刺すような寒さの中、自己採点を終え、医師としての第一歩を踏み出す前のこの1ヶ月を“執行猶予”と感じるのも無理はない。立派な医師になる。その自信がある。しかし、それは偽りだ。ただ、幼少期から夢見た自分の姿に近づくため、今は虚勢でも構わない。

堀少年よ、今夢を叶えたり。

まず、何よりも感謝を伝えたいのは両親である。父は惜しみなく学費を支え、自己犠牲を厭わず私を育ててくれた。母もまた、変わらぬ愛で支え続け、いつも寄り添ってくれた。そして両祖父母も、ずっと私を応援してくれた。特に亡き祖母は、「私はあなたのファン1号」と口癖のように言ってくれていた。心から感謝している。ありがとう。そして、これからは思う存分、恩返しをさせてほしい。

次に、日本大学医学部、そしてこれまで出会った仲間感謝を伝えたい。受験期、浪人生活を経て私を受け入れてくれたのは本学だけだった。他の大学はすべて学科試験で落ちただけだから、ここで6年間を過ごしたのは必然だったのかもしれない。

この環境だからこそ得られた仲間がいる。正直、20代になっても喜怒哀楽を分かち合える友ができるとは思っていなかった。不思議だ。実に愉快だ。本学でなければ、コロナ禍でなければ、ここまで特別な6年間にはならなかっただろう。これもまた感謝である。ありがとう。これからも、医師としてではなく、一人の友としてよろしく頼む。

この6年間で得たものは、医学が4割、人間性が6割だ。まだまだ未熟であることは承知している。しかし、これまでの人生で学べなかったことを知る機会を得た。それを本当に学びきれたかはわからない。だが、それでもここまでたどり着いた。

険しい道だった。時に先の見えない、果てしないトンネルを歩き続けたこともあった。それでも乗り越えてきた。だからこそ、次の目標もきっと乗り越えられる。どんな困難も、たとえ周囲に「不可能だ」と言われようとも、一途に努力し続けられる人間でありたい。変わりゆく人々、変わりゆく世の中の中で、変わらぬ軸を持ち続けたい。



卒業を祝して

看護専門学校長 大島 猛史

第58回生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんは看護に従事するという高い志を持ち、夢と希望に胸を膨らませ、本校の門をくぐりました。今、卒業に当たりその時の感動を新たに思い起こし、医療人として社会で新たな道を拓いてくれることを望みます。

皆さんはこの3年間にわたる本校での学習、仲間との切磋琢磨を通じて、多くの知識、技術を習得し、看護に携わっていくプロフェッショナルとしての決意を固めたことと思います。本校の教育理念は、やさしさ・倫理観・豊かな感性を備え、対象である人間を尊重した看護を実践できる専門職業人を育てることです。この3年間の学習により皆さんは自ら学び、自ら考え、自ら道をひらくという医療人としてはもちろん社会人としての不可欠な資質を体得し始めたのではないのでしょうか。これらの資質は3年間程度で身につくものではありません。これから一生をかけて向上させていくものです。本校での3年間の学習はそのきっかけを作ったにすぎませんが、この経験はこれから看護の道を歩むにあたり皆さんの大きな財産となります。本校を卒業し、まさにこれからが医療人としての新たなスタートです。新たな決意を胸に刻んでください。

皆さんが入学したころはまだ社会がコロナ感染対策に手を焼いているときで、本校の講義、実習も大きな制約を受けていました。看護は人と人とのつながりを大切にする仕事です。限られた時間の中で高度な知識、スキルを身につけていかなければならない状況下で、学業に対する不安を胸に抱いていたのではないのでしょうか。ようやく2023年5月に新型コロナが季節性インフルエンザと同等の5類感染症となり、コロナに対する制約が解除され学生生活は徐々に平常化していきました。皆さんはパンデミック下の困難な学習環境を経験したにもかかわらずそれを乗り越え無事卒業することができました。それはとても誇れることです。そして、皆さんと同等に、あるいはそれ以上に艱難辛苦を共にしてきた方々があります。これまで皆さんの成長を見守り限りない愛情を注ぎ育ててくれた保護者の方々にまず感謝を述べてください。

さて、皆さんは、これから、一医療人として社会に出ます。皆さんがこの3年間で身につけた能力は社会にとっても役に立ちます。多くの人を救い、幸せにすることができます。しかし、高度な専門的知識、技術を発揮するには一市民としての広い視点を持ち、医療を受ける立場の人々心を理解しなければなりません。広い視野で社会全体に関心を持ち続けることが重要です。社会でいま何が起きているのか、何が問題となっているのか、豊かな感性で世の中を感じ取ってください。われわれ医療者はともすれば医療関連のみに興味が集中し視野が狭くなっていく傾向にあります。社会にくまなく目を向け、人々に共感し、高い倫理観を持ち、皆さんの力を存分に発揮してください。

今年、日本大学医学部は創設100年を迎えました。看護学校の歴史については、1932年に駿河台病院附属看護婦養成所が設置され、これが現在の医学部附属看護専門学校の礎となっています。さらに、1965年に、医学部附属板橋准看護婦養成所が廃止され、それに伴い3年課程定員30名の医学部附属高等看護学院が設置されました。1980年に医学部附属高等看護学院を専修学校に切り替え、医学部附属看護専門学校として設置し、今日に至っています。本校は長い歴史を誇る看護専門学校として、数多くの優れた看護師を社会に送り出してきました。その伝統を受け継ぎ、皆さんも今、看護の現場で必要とされる「知識」「技術」「思いやり」をしっかりと学び、身につけてきました。日本大学医学部附属看護専門学校は皆さんのかけがえのない学び舎です。そして、現在、医療で現場ですでに多くの同窓生が活躍しています。ぜひ、同窓生のつながりを大切にしてください。これから社会に旅立とうとする現時点ではその重要性をあまり意識しないかもしれません。しかし、人とのつながり、特に同窓の絆はきっと皆さんのこれからの人生の大きな力になってくれると確信しています。本校の卒業生であることに誇りを持ち、これからの人生を歩んでください。

ご卒業おめでとうございます。これからの皆さんの医療人としての輝かしい未来に期待しています。

令和6年度 各賞受賞者



学長賞受賞



山田 楓乃



優等賞受賞



檜山 美祈



学部長賞
受賞



村上 小雪



校長賞
受賞



瀬戸口 心



3年間の思い出

58 回生 黒岩 花瑠愛



私は入学当初、高校生までのオンライン授業や主にタブレットを使用した授業形態とは違い紙の資料を用いた授業であることや、授業の進むペースが速いこと、病院での臨地実習という未知な学習に沢山の不安を抱いていました。学習面では特に2年次の課題の多

さや、臨地実習では患者さんや指導者とのコミュニケーションなどの壁に直面し、何度か挫折しそうになりました。しかし、同じ看護の道を目指す仲間たちと日々の学習を重ね、支えあったことで前に進むことができました。また、どんなに朝が早くても毎日お弁当を作ってくれる家族がいて、沢山のの人に支えられながら今日まで乗り越えることができました。

3年間で最も濃い時間を過ごしたと感じるのは領域別実習です。領域別実習が始まった当初は、先が見えないと感じ逃げ出したいと思ったり、患者さんとの関わりや援助の方向性、看護の実践など様々な課題と向き合うなかで看護の難しさを痛感しました。私は老年看護学実習で1人の患者さんを3週間継続して受け持たせていただきました。その患者さんは術後の疼痛が強い中、リハビリを頑張っていたため辛い毎日でしたが、お話し好きという特徴からリハビリ中に気を紛らわすためコミュニケーションを行いました。すると、「あら、もう終わったの、リラックスして出来たわ。」と声を掛けて下さりました。その後もリハビリが進み、患者さんの自信へと繋がったようでした。このことから私の看護は患者さんのためになっていたのだと実感でき、自信が持てるようになりました。その後の実習ではこの経験を活かし、患者さんそれぞれがもつ価値観やニーズなどの個別性を捉え、その人の強み、その人らしさを引き出しながら看護を実践していくことができました。看護に対して難しさを感じる中に楽しさ、またやりがい、達成感を感じるようになりました。

3年間の学生生活を終え、視野を広く持ち、患者さんに寄り添う憧れの看護師像に少し近づけたように感じます。最後に、苦痛を伴うなか快く受け入れてくださった患者さんはじめ、そのご家族の方々、ご指導していただいた病棟スタッフの皆様、諸先生方、また一番近くで支えてくれた家族に感謝いたします。医療従事者の一員となる一步を踏み出したこの3年間で学び得たことを糧とし、周りの人から信頼される看護師になれるよう頑張っていきます。

3年間を振り返って

58 回生 松本 七海



卒業を控え、この3年間を振り返ると、3年前の4月、看護という新たな門をくぐり、仲間と励まし合いながら困難を乗り越えてきたこと、実習で出会った患者さんのことを思い出します。

1年次は、初めて学ぶ医療や看護の学習に戸惑い、苦労の連続でした。看護を学ぶために必要な自分なりの勉強方法が見つからず、

試行錯誤な日々でした。しかし、思い返すとこの勉強が現在の自分の看護の基礎となり、この時の苦労は必要なものであったと感じます。基礎看護学Ⅰの実習では初めて患者さんを受け持たせていただきました。校内実習とは全く異なる環境で、看護学生としてはじめて関わる患者さんであり、コミュニケーションの時にとっても緊張しました。看護援助では、患者さんに初めて「ありがとう」と感謝の言葉をいただき、人の役に立てたことを実感し、進むと決めた看護の道に更にやりがいを感じたことを覚えています。

2年次の実習は、1年次からさらに進んだ学習となり看護過程を通して対象理解を深めていきました。患者さんに看護を提供するために必要な知識や技術の不足を実感し、自信を無くすこともありました。疾患や治療については、授業で習ったことを実際に患者さんを通して理解することで、より深い学びにつながりました。

3年次の領域別実習では、患者さんには一人ひとりの価値観があり、疾患の捉え方や不安なことが異なっていたため、個別性を実感し対象理解の重要性に気づきました。自身の主観的な判断で決めるのではなく、様々な方向から考えて患者さんとコミュニケーションを取り、個別性を捉えて看護する大切さを学びました。また、自分の関わりで患者さんが笑顔になる度に、患者さんの力になれた喜びを感じ自信となりました。

看護師になると決めて進んだこの3年間は楽しい事ばかりではありませんでした。苦しい時間と戦い本当に看護師に向いているのか自分と何度も向き合いました。そのような時、患者さんからの感謝の言葉、経験豊富な先生方からのご助言や励ましの言葉が支えとなり、夢を叶えるためのモチベーションとなりました。また、どんな状況下でもともに励まし合い切磋琢磨してきた仲間、できると信じ見守ってくれた家族がいたからこそ、私は今この場にいます。

最後に、私達を受け入れ、多くの学びの機会を与えてくださった患者さんやご家族の皆様、ご指導くださった病棟のスタッフの皆様、先生方、辛いことをともに乗り越えてきた友人、支援してくださった全ての方々に心より感謝申し上げます。

● 令和6年度 日本大学医学部 関連病院長会議の開催について ●

令和6年12月21日（土）午後1時30分より、記念講堂にて令和6年度日本大学医学部関連病院長会議が開催された。本会議には、本学の関連病院32病院から33名の病院長等が出席した。森岡一朗卒業教育担当から医学部執行部の紹介から始まり、木下浩作医学部長より「医学部校舎・医学部附属板橋病院の建て替えについて」、吉野篤緒板橋病院長、松本直也日本大学病院長より「病院の現状と今後について」の報告が行われた。

続いて、今年度新たに新規認定関連病院となった川口きゅうぼりハビリテーション病院の紹介を行い、その後、川口市立医療センター呼吸器内科部長の羽田憲彦先生より「当院（地域基幹病院）での呼吸器内科臨床実習について」、埼玉県立小児医療センター泌尿器科科長の大橋研介先生より「診療科の枠を超え日本一を達成した日大の絆」をテーマとした講演が行われた。

会議の最後には、出席された関連病院の先生方からご意見・ご要望を伺い、医学部執行部との意見交換会を実施し、閉会となった。

関連病院の先生方からは、臨床実習のフィードバック等の要望をいただいた。昨年度までは医療連携が主なテーマであったが、今年度は卒前教育を中心とした内容で講演が行われた。



第 563 回日本大学医学会例会

第 563 回 日本大学医学会例会が令和 7 年 3 月 1 日（土）に日本大学医学部第 2 臨床講堂で開催されました。本例会は新型コロナウイルス感染症の影響により令和 2 年を最後に休止していましたが、今回 5 年ぶりの再開となりました。開会に際し、当番教室である細胞再生・移植医学の松本太郎教授が挨拶し、本例会の趣旨として若手研究者に発表機会を提供すること、特に今回は、新たな取り組みとして「臨床の部」「基礎の部」に加え「学生の部」が新設され、優秀演題の表彰が行われることが説明されました。その後、各部門の演題発表が行われました。

「臨床の部」では、糖尿病代謝内科の石原寿光教授と腎臓高血圧内分泌内科の丸山高史准教授が座長を務めました。そして、呼吸器外科の寺田宜敬先生、救急集中治療医学の高橋謙先生、産婦人科学の河竹里奈先生、法医学の青木弥生先生、腫瘍病理学に加藤廉先生、循環器内科の小嶋啓介先生、イムス富士見総合病院小児科の森内優子先生、心臓血管外科の原田篤先生、循環器内科の福本勝文先生の 9 名が、それぞれ症例報告や臨床研究の成果を発表しました。

「基礎の部」では、生化学の槇島誠教授と腫瘍病理学の中西陽子准教授が座長を務め、血液腫瘍内科の並木貴宏先生、小児外科の上瀧悠介先生、細胞再生・移植医学の風間智彦先生、形成外科の宮下采子先生、循環器内科の北野大輔先生の 5 名が研究成果を発表しました。

「学生の部」では、松本太郎教授と微生物学の相澤志保子教授が座長を務め、医学部 5 年生の瀬田大智さん、2 年生の金子拓矢さん、5 年生の石井順子さんの 3 名が自身の研究成果を発表しました。いずれの発表も高度な研究内容を自分の言葉で分かりやすく説明し、質疑応答にも明確に対応するなど、大変活発な討議が行われました。

閉会にあたり、人体病理学の羽尾裕之教授が挨拶し、「学生の皆さんが一般の研究者と同等かそれ以上の発表をしたことに感銘を受けました」との感想を述べた後、優秀演題賞が発表されました。選考の結果、「臨床の部」では、子宮頸部上皮の CD86 発現と子宮頸部上皮内腫瘍 (CIN) の進展の関係を明らかにした産婦人科学の河竹里奈先生（若手）と、血清リポ蛋白 (a) 値と大動脈プラーク破綻の関連を報告した循環器内科の小嶋啓介先生（一般）が受賞しました。「基礎の部」では、脱分化脂肪細胞 (DFAT) を用いた創傷治療用人工真皮開発の基礎研究を行った形成外科の宮下采子先生（若手）と、動脈硬化ブタ冠動脈ステント留置モデルを

用いた直接作用型経口抗凝固薬 (DOAC) エドキサバンの有効性を示した循環器内科の北野大輔先生（一般）が受賞しました。「学生の部」では、中鎖脂肪酸であるヘキサノ酸が、腫瘍微小環境の免疫抑制状態を改善し抗腫瘍免疫応答を増強させることを明らかにした医学部 5 年生の瀬田大智さんが選ばれました。

本例会では、医学部生や若手研究者が積極的に参加し、学術的な議論が活発に交わされたことで、大きな成功を納めることができました。今後、より多くの教授陣や上級研究者にも参加を促し、若手研究者との討議や意見交換をさらに活性化することで、本学の研究力の向上に繋がることを期待されます。



令和6年度人権侵害防止に係る巡回講演会 開催

令和7年1月27日(月)午後4時より令和6年度第7回SD研修として、人権侵害防止に係る巡回講演会が記念講堂で開催された。

テーマは「ハラスメントのない就学・就業環境を目指して」様々なハラスメントの実例をもとに、自身が加害者になら

ないために、また被害にあった際の対処方法や相談窓口について理解を深めるために、弁護士である山縣秀樹先生に講演いただいた。

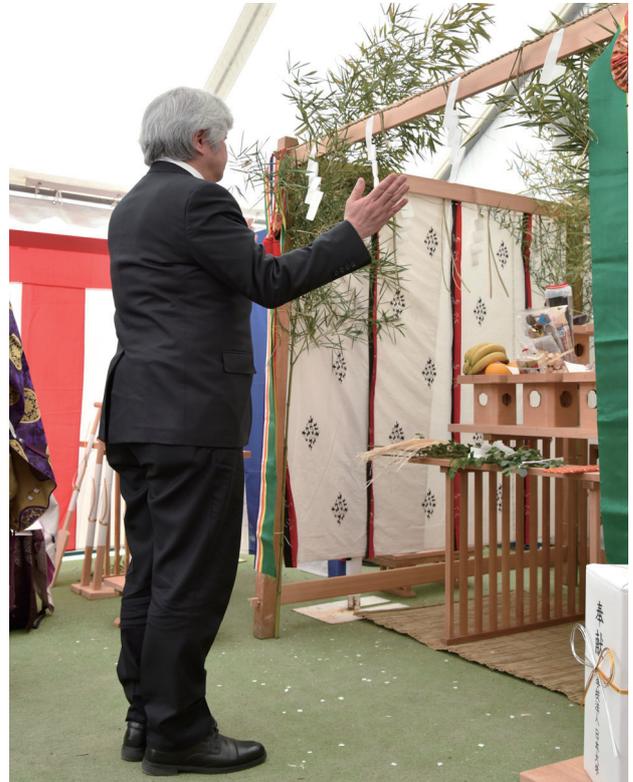
なお、講演会は対面とライブ配信のハイブリッド形式で行われ、教職員ら延べ355名が受講した。

看護専門学校校舎の地鎮祭挙行

令和7年2月26日(水)午前11時より、看護専門学校校舎の新築に伴い、旧テニスコートにて、東新町氷川神社より神職をお招きし、工事の安全を祈願する地鎮祭が挙行されました。

本部より浅井^{かずとみ}万富常務理事、吉澤^{おさむ}長武管財部長らにご来臨を賜り、医学部からは木下浩作医学部長が工事の安全を願い^{くわい}鍬入れの儀、^{たまくしほうてん}玉串奉奠を行いました。同窓会からは斎藤忠則副会長をお招きし、併せてご祈念をいただきました。

令和7年12月に引渡しされる看護専門学校の新しい校舎は、教室3室、実習室2室を持つ、鉄骨造3階建て、延べ床面積約1,400㎡(約420坪)の建物となります。竣工が待ち遠しいですね。





大西 貴子

【准教授】 視覚科学系眼科学分野
令和7年1月1日就任

2025年1月1日付で視覚科学系眼科学分野の准教授を拝命いたしました。

私は2004年に日本大学医学部を卒業し、日本大学医学部附属板橋病院および日本大学病院にて初期臨床研修を修了後、同大学眼科に入局いたしました。同門の先生方からの温かいご指導とご支援のもと、関連病院の東松山市民病院および災害医療センターでは眼科医長を務めさせていただきました。

私の専門分野は涙道疾患とぶどう膜炎です。涙道閉塞による流涙に対する涙道内視鏡治療は、日本が世界を先導する治療法の一つです。また、大学病院の特色を活かし、涙道内視鏡で

の治療が困難な症例に対する涙囊鼻腔吻合術にも積極的に取り組んでおります。

ぶどう膜炎は伝統的な疾患でありながら、PCRによる原因究明や生物学的製剤による新しい治療法が著しく進歩しております。全身疾患との関連も深いため、他科の先生方との緊密な連携のもと診療を行っております。これらは眼科分野の中でも専門性が高い領域であり、私の知識と経験を後進の先生方に伝えられるよう、指導に全力を尽くしてまいります。母校である日本大学に微力ながら貢献できるよう尽力してまいります。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。



北川 順久

【准教授】 視覚科学系眼科学分野
令和7年1月1日就任

令和7年1月1日付で山上聡主任教授のご高配を賜り、視覚科学系眼科学分野の准教授を拝命いたしました。

私は2008年に日本本学を卒業、本学の視覚科学系眼科学分野に入局し、臨床・研究を行ってまいりました。これまで多くの先生方や関係者の皆様にご指導、ご支援を賜り、深く感謝申し上げます。診療、研究、教育に引き続き力を注ぎ、患者様により良い医療を提供できる

よう努めてまいります。また、後進の育成にも尽力し、若手医師が成長できる環境を整えることを大切にしたいと考えています。

これからも、日々研鑽を重ね、病院・医局の発展に貢献できるよう尽力いたしますので、皆様のご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

